



隣の人妻と 女教師と僕

羽沢向一
挿絵／みやびつづる

立ち読み版



目次

Contents

プロローグ	夏には何かがはじまる……………	4
第一章	人妻が透けるワンピース……………	19
第二章	人妻はチアリーダー……………	56
幕間一	人妻といろいろ……………	99
第三章	人妻と女教師のゴンドラ……………	114
第四章	見せる人妻と見せられる女教師……………	148
幕間二	人妻と女教師といろいろ……………	193
第五章	人妻と女教師に赤い首輪……………	211
エピローグ	夏が終わってもはじまる……………	252

登場人物

Characters

犬養 尚樹

(いぬかい なおき)

両親が海外へ赴任したために一人暮らしをしているごく平凡な高校生。甲斐甲斐しく世話をしてくれる隣家の彩海に淡い思いを抱いている。

布施 彩海

(ふせ あやみ)

犬養家の隣に住む 27 歳の若奥様で、長身の巨乳美女。ヒップも大きく、日本人離れした体型をしている。元チアリーダーで、明るく澁刺とした性格。

沖名 静子

(おきな しずこ)

尚樹の担任教師。清楚で物静かだが豊満な肢体を持っている。彩海の大学の同級生。

第一章 人妻が透けるワンピース

七月十三日

「尚樹くん、起きて」

やさしいメロディとともに、肩を動かされた。

ベッドサイドに置いてある目覚まし時計のかん高いアラームではなく、眠っている脳にじんわりと染みこむ心地よい音色だ。

「尚樹くん、もう七時よ」

まぶたを開くと、純白の豊満なふくらみがある。

白いワンピースに包まれた大きなバストが、もぎ取られるのを待つ熟した果実のように、横たわる尚樹の上に差し出されていた。

「おはようございます、彩海さん」

「おはよう、尚樹くん」

いつものように微笑む彩海さんだが、今朝はどこか違って見える。あらためて視線を彩海の顔から足まで、そっと走らせた。

(あつ)

と、驚く変化を発見した。

(ワンピースの裾が短い！)

今日の彩海は、純白のワンピースだ。身体の前面に白いボタンが縦に並んでいて、すべてはずせば、首から裾まで完全にはだけけるデザインだ。以前にも同じデザインのワンピースを見たことはあるが、裾の長さが違う。

昨日までは、どんな服を着ても、裾の長さは必ずふくらはぎまでであった。

今日、彩海の裾は膝までの長さしかない。普通といえれば普通の長さだが、少しだけ増えた足の露出がまぶしく、男子高校生の目と心臓を射る。

しかもワンピースの構造上、一番下にあるボタンから下には三角形の隙間ができる。もちろん膝の位置だから、見えるのは裏地だけだが、やはりドキドキしてしまう。

(それに、いつもよりもワンピースがピッタリしているみたいだ)

彩海の豊かなプロポーションは、主婦らしいおとなしい服を着ても、胸や尻のボリュームが目についた。今日のワンピースは身体全体の輪郭を、はっきりと表に出している。

(こんなボディラインで外を歩いたら、男の目を引きつけてしかたがないよ)

尚樹は心配になってくる。

(聡史さんが日本の外へ出たから、開放的になつてるのかな)

「聡史さんは無事に出発したんですか？」

「ええ。ニューヨークに到着したとメールが来たわ。聡史さんと出発前に相談して決めたのだけど、わが家から尚樹くんへ、贈り物があるの」

彩海が握った右手を、尚樹の顔の前に出した。マジシャンのようにヒラリと動いた指の間から、金属の鍵束が現れる。

「うちの家の玄関や勝手口や他いろいろの合鍵よ。今までは、わたしが尚樹くんの家の合鍵を持っているだけだったけれど、これからは尚樹くんも自由にうちに入れるわ」

「えっ、でも、彩海さんしかない家に、勝手に入っちゃうのはまずいですよ」

「なにを言ってるのよ」

彩海の大人の美貌が、子猫みたいにコロコロと笑った。尚樹は魂が奪われる思いがする。「尚樹くんとわたしの間で、そんな遠慮は無用よ。はい。受け取って」

尚樹は上体を起こし、右手で鍵を握った。ひんやりしているはずの鍵は、彩海の体温で温まっていた。

「さあ、のんびりしていると遅刻しちゃうわ。起きて起きて！」

「うわ、ちょっと！」

また彩海の両手で、シーツを盛大にまくり上げられる。またもTシャツとトランクスが剥きだしにされ、尚樹の意志を無視して思いつきりつぱっている青いテントが、彩海へ

向けて差し出された。彩海はほがらかにテントに笑いかけてくる。

「今日も若さ澁刺ね、尚樹くん」

「すみません。すぐ着替えます」

「聡史くんがいなくなつたから、料理への情熱は尚樹くんに集中しているのよ。朝ご飯をお楽しみに、ね」

「はい！」

自然と尚樹の声が弾んだ。彩海の新しいメニューを、夫の聡史ではなく、自分が先に食べられる。それだけで自分と彩海の距離が大きく縮まつた思いがする。高揚した視線を、部屋を出ていく彩海の後ろ姿へ向けて、尚樹は愕然とした。

高く持ち上がる尻たぶに貼りついたワンピースの白い布に、パンティラインがくつきりと浮き出ているのだ。こんなことは、今まで一度もなかった。見えているのは、Tバックやサイドが紐になっているような過激なものではなく、主婦らしく大きな尻をしっかりとカバーするデザインだ。

それでもはじめて目にしてしまった彩海のパンティラインに、尚樹の下半身は猛烈にリアクションしている。もちろん町を歩いていて、女の下着が透けて見える経験はたまにあるが、彩海のものとは特別だ。まったく別の存在だ。

（彩海さん、もしかして、ぼくを誘っているんだろうか……いや、そんなこと、あるはず

がない、バカな考えはよせ……)

頭では夢物語を否定していても、腹には最高度に膨張した亀頭がぶつかっていた。

七月二十日

「彩海さーん、庭の草むしり、終わりましたー！」

布施家の庭からテラスへ移動した尚樹は、かぶっていた麦わら帽子を手に取り、パタパタと顔をあおいだ。顔中にかいた汗を、タオルでぬぐう。青いTシャツも汗を吸いこんで、胴体に貼りついている。

家の合鍵をもらってから、一週間がたった。尚樹と彩海は互いの家を行き来するうちに、二つの家の炊事や掃除や洗濯は彩海がこなし、力仕事は尚樹が担当することになった。

一学期の終業式から帰ったこの日も、昨日からの約束通り、庭の手入れをしたところだ。「お疲れさま、尚樹くん」

テラスに面した居間のガラス戸が開き、彩海の白いワンピース姿が顔を出す。一週間前の、聡史がアメリカへ旅立った翌日に着ていたものと同じデザインだ。ただ尚樹の目には、さらに少しだけ裾が短くなっている気がする。とにかく今日もまた、ミニスカートから伸びる二本の足はまぶしく、バストとヒップのくつきりした輪郭は、ただでさえ熱い尚樹の

体温を上昇させた。

「居間が上がって、カルピスを飲んで」

尚樹は自分の指やジーパンの裾についた茶色い土に目をやる。

「でも、手足が汚れているから」

「それくらい、いいわ。外は暑いでしょう」

彩海の身体の周囲から、クーラーの涼気が流出する。ワンピースの肢体とともに、抵抗するにはあまりにも魅力的な誘惑だ。

サンダルを脱いで屋内に上がると、汗がさつと引いていく。土が落ちないように気をつけながら、テーブルのガラスのコップを手に取り、一気に喉に流しこんだ。乾いた体内に、甘酸っぱい液体がすると染みこんでいく。

「ふーっ、生きかえる！」

ふと見ると、居間の壁に並ぶ本棚に目が止まった。この一週間で見慣れた本棚に変化があった。正確には、聡史の集めた技術関係の洋書を収める本棚の上が、少し変化している。そこには写真立てが並んでいて、出会ったところから最近までの夫婦の写真が誇らしげに飾っている。聡史は中学までアメリカに住んでいたそうで、そのころの習慣をつづけていた。今日は、写真立てが二つ、増えていた。

ガラスの中に収まっているのは、それぞれ異なるスタジアムの観客席で写した写真だ。

ひと目見てチアリーダーだとわかるコスチュームを着た二人の若く美しい女が、一枚は手を握り、もう一枚は肩を組んで、カメラへ向けて魅力たっぷり笑っている。

コスチュームは目が覚める鮮やかな赤い色で、ノースリーブにマイクロミニスカートという露出の多いデザインだ。胸には白い星のマークがある。

二人のチアリーダーは、顔はあきらかに他人だが、双子のように同じ髪形だった。軽いウェーブのかかった髪が、肩で揺れている。

引きこまれる二つの笑顔に、尚樹は見覚えがあった。少なくともひとつは、すぐそばにいる。

「うふふ。その写真に気がついたのね。昨日、小物入れを整理していて、懐かしい写真が出てきたから、飾っちゃったわ」

「この右側のチアリーダーは、彩海さんですよ」

「ええ、そう。わたし。大学で応援団に入っていたの。二枚とも、試合が終わった後に撮ったのよ。それは二十歳のときね。あのころは若かったわあ」

「今でも、彩海さんは若いですよ」

「お世辞なんて、言わなくてもいいのよ。いっしょに映っているのは同じ応援団にいた親友だけど、じつはね、尚樹くんがよく知っている人なの」

そう言われて、想像が確信へと変わった。

「もしかして、沖名先生!？」

「正解っ! 尚樹くんの担任の静子とは、同じ大学だったのよ」

「毎日地味なスーツで、いつも真面目な顔をしている沖名先生が、チアリーダーをやっていたなんて信じられないな。授業はわかりやすく、熱心な先生だけど、面白みがないんですよね」

「静子は思いつめるタイプだから、教師は浮かれてはいけなと思いますのわね。そうそう、尚樹くん、汗を落としてさっぱりしたいでしょう。お風呂を入れてくるわ」

彩海がいそいそと廊下へ出ると、尚樹はあらためてチアリーダーの写真を凝視した。

彩海も、静子先生も、あたりまえだが、ともに若い。十七歳の尚樹と三歳しか変わらない姿からは、青春の息吹が伝わってくる。

「七年前の彩海さんもすてきだけど、やっぱり今の大人の彩海さんのほうがいいな」

マイクロミニから伸びる二人の太腿を鑑賞していると、大きな悲鳴が聞こえた。外ではなく、家の奥からだ。

「彩海さん!」

床を踏み鳴らして、尚樹はダッシュする。勝手知ったる他人の家とばかりに、悲鳴が聞こえたと思しきバスルームへと直行した。

「どうしたんですか、彩海さん！」

バスルームのガラス戸を勢いよく開くと、頭から足先までびしょ濡れの彩海が、タイル張りの床に両脚を投げだして座りこんでいた。

「驚かせちゃって、ごめんなさい。蛇口からお湯を出そうと思ったら、シャワーになっていて、頭からかぶつちやつたわ。聡史くんがいたなら、彼のせいでできるんだけど残念ね」
笑って語る彩海の言葉は、尚樹の耳には届かなかった。いや、鼓膜は確かに振動しているが、脳がパルスを受信しない。

尚樹の意識はすべて、彩海の肉体に集中している。自分が頭の中で、同じ言葉を何度もくりかえしていることにすら、気づいていない。

(透けてる……)

(透けてる……)

(透けてる……)

(彩海さんが透けてる……)

シャワーを浴びた彩海の白いワンピースは、肉体を隠す機能を完全に失っていた。布は隙間なくべつたりと胴体に貼りつき、身体の輪郭を完全に再現している。形だけでなく肌の色を透かして、裸の上に透明なビニールをまもっているようだ。

濡れた胸には、ブラジャーが見えた。乳房のほとんどを包みこむ白いカップにレースを

あしらったかわいい趣向のものだ。

下半身には、ブラジャーと同じスタイルの、可憐なパンティが人妻の秘密を守っている。下着が完全に見える姿になっても、彩海は隠そうとしない。尚樹がほんの小さな子供であるかのように、安心しきった態度で、床に座っている。

しかし尚樹の視線は、子供のもでも、血縁のものでもなかった。完璧に浮き上がったブラジャーの白い丸みを視線でなでまわし、その触り心地を頭の中に必死で再現している。女の胸に触れたことのない童貞少年が、似ていると思う感触の記憶をかき集めて作った脳内の幻にすぎないが、尚樹は自身が想像したイメージに焚きつけられて、ますます身体を昂らせていく。

幻の触感、肌色の胴体をなでまわしながら下っていき、なめらかな腹に浮かぶ縦長のへその中にも潜りこんだ。

さらに左右の太腿をまさぐり、内腿の中心にあるパンティの三角地帯に触れる。しかし、わからない。女の極秘の部分など、童貞少年には想像のしようもなかった。身を裂かれるほどのもどかしさが、尚樹の身体を燃え上がらせる。

「尚樹くん？」

彩海が立ち上がろうとして、腰を浮かせた。ワンピースの裾がずり上がり、膝から太腿が覗く。むっちりした肌色がより鮮明になって、少年の目を射抜いた。

尚樹は叫んだ。ガラス戸を開け放したバスルームに、叫び声が反響する。

「彩海さんっ！」

衝動に駆られた裸足の両脚が、濡れたタイルを踏みしめていた。滴を飛び散らせて、十歳の男子高校生の身体がバスルームに飛びこむ。

「彩海さんっ！」

「どうしたの、尚樹くん、あっ！」

両手の指が、透けたブラジャーを力まかせにつかんだ。普段の尚樹なら、けっしてやらない乱暴な動きだ。はじめて感じる未知のやわらかさが十本の指と二つの掌に広がり、その勢いのまま彩海の身体をタイルの床に押し倒した。

彩海がうまく受け身を取らなければ、後頭部を硬い床にぶつけて、大惨事になっていたろう。そのことにも気づかず、尚樹は横たえた彩海の腰をまたいで、両膝をついた。

彩海が濡れた床に頭をつけて、馬乗りになった少年をじっと見つめる。人妻の顔に浮かぶ表情の意味には、尚樹は気づかない。

「彩海さん！ 彩海さんっ！」

名前をさらに何度も口を上らせて、ワンピースの胸のボタンをはずしにかかると、しかし興奮して震える指はまとも動かない。ボタンを穴にくぐらせることすら、まともにはできなかった。

「このつ、はずれないのかっ！」

すぐにボタンをはずす努力は放棄した。両手でワンピースの布を握りしめる。そのまま腕力で無理やりに胸をはだけさせるつもりだ。

「待って、尚樹くん！」

その言葉も、尚樹の意識には到達しなかった。一瞬早く彩海の手が動かなければ、現実にはボタンはすべて引きちぎれていただろう。力まかせに白い布をつかむ二本の腕をかくぐつて、しなやかな指が驚異的なスピードで自身の着衣のボタンをはずした。清流に躍る若い魚のように指が女体の中心を下り、首から裾まで一気にボタンを開放していく。

意外な展開に、尚樹の動きがわずかに停滞した。左右の手首に、彩海の両手の指が触れる。

「見て、尚樹くん。わたしを見て」

彩海と尚樹の手の動きがシンクロして、ワンピースが左右に広げられる。ゆで卵の薄皮を剥がすように布が移動して、胸から膝まではだけられた。人妻の濡れた全身が、馬乗りになった尚樹の下にあらわになる。

まだ全裸ではない。ブラジャーとパンティは残っている。

それでも尚樹は、言葉にならない感嘆の声で喉を鳴らした。

露出した胴体は、女体でしかありえない美しい曲線を描いている。よく目にする若いア

イドルたちの身体と比較すれば、幅も厚みも大きい。しかし、けっして太っているのではない。尚樹のあふれる若い欲望をやさしく抱擁して、受け止めてくれそうな、豊かな魅力を持っている。

成熟した肉体を飾るブラジャーのカップは、十分に大きなサイズなのに、中に収納された乳房は窮屈そうに見える。寄せられた胸の谷間は吸いこまれそうに深く、カップの上部からはみ出した胸は、見つめる少年を誘うように盛り上がっている。

ブラジャーを弾き飛ばしそうな乳房の量感を見せつけられて、水に濡れても透けないカップの内側で、どれほどの大きさの乳首が、どんなふうに押しこまれているのか、尚樹は想像しないではいられない。

パンティも透けてはいない。しかし、かわいいデザインの中心が、恥丘に押されてふつくらと盛り上がる様子は、いよいよ大人の女性の豊穣さを象徴していた。

魅惑のランジェリー姿を記憶にしっかりと収めると、尚樹は噴出する肉欲に従って、ブラジャーに手を伸ばした。だが指でむしり取る前に、先読みした彩海自身の手で、フロントホックをはずされる。

「ああっ」

と、かすれた息が尚樹の喉からこぼれた。

伸ばした指の前に、拘束から解き放たれた乳房が、どつとあふれる。

ブラジャーの支えを失い、重力に引かれた乳房は、横へ広がった。それでも張りを保つ乳房は、巨乳と呼ぶにふさわしい高さどボリュームを誇示して、見下ろす男子高校生へ艶めかしい迫力をアピールする。

揺れる二つの乳房の頂点では、白い美肌から淡い桜色へとグラデーションを見せる乳輪から、また触れてもいけないのに乳首がツンと立ち上がっていた。巨乳にふさわしく大粒の乳首が、キリキリと屹立している。見ているだけで男の欲望を強烈に煽り、その触り心だと味を知りたいと願わせる、最高の媚薬だった。

「……あああ」

一度は止まった尚樹の手が、差し出された乳塊に指を食いこませた。指が乳肉に埋もれ、掌の中心にしこりたった乳首が当たる。

両手に伝わる乳房の感触は、それまで想像した気持ちよさを超越していた。尚樹は感動のあまりに声を出せなかった。ただ頭の中で、歓声が響き渡る。

（やわらかい！）

片手ではとてもつかみきれないサイズの乳肉の中に、指だけでなく手全体が潜りこむ。手を温かい肉で包まれ、そのまま溶かされる気がする。

（やわらかくて、たまらない！）

乳肉をもっと深く味わおうと、尚樹は指に力をこめた。

「あんっ！」

彩海の首がタイトルをこすつてのけぞり、唇が開いた。乳房を握る少年に向けて、艶つやのあの音色を奏でる。

「ああ、うんっ！」

目の前で濡れた喉が上下し、唇が蠢く。美貌の変化とともにあふれる官能的な声音は、尚樹の情欲の炎にそそがれる燃料となった。

「あああ、彩海さん！」

息を荒くして、さらに強く乳房をこねる。そうすると、新たな感触に迎えられた。やわらかさの奥に、しっかりとした弾力があり、尚樹の握力を押し返す。さらに力を入れれば、プリプリと乳房が弾む。柔軟さと弾力を兼ねそなえて、極上の揉み心地だ。

「彩海さん、ああ彩海さん！」

ひとりでに尚樹の口から名前が飛びだし、やみくもに左右の乳房を揉みたてる。がむしやらかな指の動きに合わせて、二つの豊満な乳房が上下左右に大きく揺れ、柔肉がぶるぶると震動する。

「あつ、はあつ、尚樹くん、だめよ、あああ」

彩海の頬が朱色に染まりだし、顔を右に左にふられた。

人妻の言葉は、いつそう尚樹の手の動きを激しくさせる。掌に勃起した乳首がこすれて、

乳房とはまた異なる硬い肉の感触が弾けた。

乳首がなすられ、押し倒されるたびに、彩海の全身が震える。口から熱い声が噴きこぼれ、下半身では濡れたパンティを穿いた腰が何度も跳ね上がった。

「はうっ！ くうっ！ あああ、尚樹くん、もう、もう」

喘ぐ彩海の手が、尚樹の猛る指をつかんだ。

「お願い、尚樹くん。あああ、ジーパンを脱いで」

予想外の言葉を聞かされ、尚樹の手が止まる。

「えっ!？」

「お願い。早く、尚樹くんのおちんちんを出して」

「ええっ!？」

「もう、がまんできないの。このまま胸を揉まれつづけたら、それだけでおかしくなっちゃうわ。早く、尚樹くんの硬いおちんちんを、わたしに入れて！」

確実に媚をはらんだ、そして切羽つまった懇願の声だった。聞いているだけで、睾丸の中心が沸騰して、泡立つ精液が尿道の出口まで押し寄せてくる思いがする。

尚樹は言葉の糸に操られて、乳房から手を離れた。たふんと揺れる白い肌に、赤い指の跡が残っている。立ち上がってジーパンとトランクスをいっしょに足首まで下げて、バスルームの外へ投げ捨てる。

そそり立ったペニスが、自分の腹を打った。尚樹自身が驚くほど猛烈な勢いで勃起している。自然に包皮を剥いた亀頭はパンパンにふくらみ、ギラギラと赤く色づいて、今にも破裂するのかわかと思わせるほどだ。

その間にも、尚樹の視線は、彩海の下腹部に据えつけられていた。

少年がベルトに手をかけると同時に、彩海もパンティに両手の指を引っかける。尻を床から浮かせると、溜めることなく、するりと最後の下着を抜き取った。

「ああっ！」

また尚樹は言葉にならない声を発してしまふ。

尚樹の両目が集中していることを意識して、彩海は床に横たわったまま、両脚を広げる。太腿とタイトルの間に濡れた摩擦音を鳴らして、両脚の角度が九十度以上になった。さつきまでパンティの布を盛り上げていた恥丘のふくらみが、大きく見開いた尚樹の目に飛びこんでくる。白い女の中心地を、縦の亀裂が走っているのはつきりとわかった。

尚樹は、深い驚嘆と、いきり立つ欲望の間で、手足が固まったように動きを止めた。

目だけ爛々とぎらつかせる少年の前で、彩海の両手の指が自身の股間にそえられた。指が恥丘の左右に押し当てられ、ためらうことなく広げられる。

見て、とは彩海は言わなかった。言われなくても、尚樹はじっと見つめている。

生まれてはじめて目にする女の秘密は、ひたすら美しい。

精密に設計されたとしか思えない肉と粘膜のパーツが、生々しくも愛らしい生花を咲かせている。まるで肉の花弁が蠢いて言葉を生みだしたかのように、彩海の声が願いを告げた。

「尚樹くん、おちんちんを彩海に入れて」

尚樹の頭が赤熱して、広げられた美しい裸体へ飛びこんだ。爆発寸前の亀頭を、むやみに彩海の股間めがけてつつこもうとする。しかし初体験の少年が、すんなりとうまく挿入できはしない。うまくやる方法も知らない。

「あせらないでいいのよ、尚樹くん」

という彩海の言葉も届かない。駄々っ子をあやすように、人妻の右手が勃起をつかんだ。尚樹が気づかないままに導き、膣の入り口へと亀頭を当てる。

「うあうっ！」

尚樹の声が裏返る。

「はああっ、いいっ！」

彩海の声が歓喜に色づく。

尚樹にとって、生涯最初の快感だ。男の肉体で最も敏感な部分が、熱く潤った粘膜に隙間なく包みこまれ、ねっとりとしやぶられる。ペニスの快楽神経を剥きだしにされて、すべてを活性化された。

（これが、これが女の人の中！ 熱くて！ ぬるぬるで！ 気持ちよすぎるっ！）

押し寄せる鮮烈な快感の大波に吞まれて、無我夢中で腰を前後させて、彩海の熱い女肉を貫きつづける。

尚樹は前戯のことを完全に忘れていた。初体験をいろいろと想像していたときには、あちこちから仕入れた知識をもとに、指や口で前戯をしようと考えていた。また前戯をして濡らしてあげなければ、女は痛がると思っていた。

彩海は、すでにたっぷりと濡れていた。膣の中は充分に湿潤で、勢いにまかせて突進してくる尚樹を難なく受け入れている。人妻の肉体は、十歳年下の未使用のペニスを食い締め、大きな悦楽を堪能していた。

「ああっ、いいっ！ 尚樹くん、すてき！ はああっん、尚樹くんのおちんちんは、あああ、最高ようっ！」

彩海は両腕を、尚樹の汗の染みこんだTシャツの背中にまわし、自分の豊乳を少年の胸に押しつけた。勃起した乳首が布越しに男の筋肉にこすれて、ピリピリッと快楽の電光が閃く。

開いた両脚も持ち上げて、尚樹の裸の尻にまわして、少年が夢中で腰を上下させる手助けをしている。

忘我の極みという表情を見せる尚樹の顔に、彩海は唇を押しつけて、何度もキスをむさ

ぼる。

「うんっ、んちゅっ、んんん、尚樹くん、たまらないわ！」

たまらないのは尚樹のほうだ。人妻の熟れた肉体がペニスだけでなく、全身にからみついて、快楽の一斉射撃を受けた。ペニスだけでなく、背中も、胸も、尻たぶも、頬も、彩海の愛撫を受けて、性感帯と化している。

「ううっ、うああっ！ たまらないっ！」

挿入してから、どれほどの時間が過ぎたのか。尚樹にはまったくわからない。時間の感覚など、快感の大海に沈んでいる。ただ、ごくごく短いことは確かだった。

その短い時間の中に、尚樹は自分の身体全体が一本のペニスになった気がする。彩海の膣内で熱い粘膜にしごかれていく快感と、Tシャツの布越しに巨乳で胸を圧迫される悦びが、ひとつになっていく。人妻の手足で背中と尻を抱かれ、唇同士を重ね合わせる快楽も、ひとつに重なり、身体全体を射精へと高める。

彩海の肉体になにをしても、彩海からなにをされても、すべてが未知の快感に変化して、新たな欲望をつのらせた。

（ひとつになる！ そうだ。ぼくは彩海さんとひとつになったんだ！）

以前から彩海への思いで充滿していた肉体は、念願を果たしてたちまち限界を迎えた。ほんの数分もたたないで、精果が決壊した。今まで何度もくりかえしてきた自慰ではあり

えない大量の精液が、怒涛の洪水となって、体内を流れる。限界ギリギリの量を通した尿道がはちきれそうになり、痛みに近い壮絶な快感が若い肉体を苛んだ。

「あああつ、出るっ！ 彩海さん、出るうううっ!!」

尻たぶの筋肉が強く引き絞られて、亀頭が膣の奥まで潜入する。

彩海の膣肉もタイミングを合わせるように、ペニスをきつく抱きしめた。

「おおおおおおおっ!!」

灼熱の歓喜が亀頭を貫き、鈴口から爆発的に噴出する。積年の願望が射精と化して、彩海の腹の中に染みこんでいく。

尚樹の若さを体内に撃ちこまれて、彩海も昇りつめた。

「ほおおおおおっ！ イクッ！ 尚樹さんに射精してもらって、彩海、イクウ！ イッちやうううっ!!」

男子高校生と人妻は身体をひとつに溶け合わせるように、強く抱きしめ合った。

*

「尚樹くん、起きて」

「えっ？」

耳に入ったのは、毎朝、自分の寝室のベッドで聞かされるやさしい朝の言葉。連想ゲームのように、頭の中にカーテンを透かせた朝日と、やわらかいベッドの感触が再現される。

だが目覚めのおだやかな清々しさは、股間から突き上がる強烈な快感にとつてかわられた。途端に幻想が消え失せて、現実が押し寄せてくる。

しかし現実のほうが、夢だとは思えなかった。

気がつくと、尚樹はバスタブの縁に腰かけていた。上半身は濡れた青いTシャツを着たまま、下半身はすっぽんぽんだ。

開いた両脚の間では、彩海がタイルの上に正座している。いつの間にかブラジャーとパンティを身につけて、濡れて半透明のままの白いワンピースを着直していた。

「ゆ、夢、だったのか？」

そう、ぼつりと漏らした尚樹に、彩海がにっこりと微笑みかけた。

「驚いたわ。尚樹くんたら、射精してわたしに入れたまま、ぼんやりとしちゃうんだもの。興奮しすぎて、頭の血管でも切れたのかと心配したわよ」

「えっ！」

あわてて視線を下げると、強く勃起したままの亀頭が精液と愛液に濡れて、テラテラと輝いている。

（やっちゃったんだ！ 彩海さんの透けた身体を見て、理性が切れて、ああ、彩海さんを襲ってしまったんだ！ なんてこった！）

「ご、ごめんなさい、彩海さん。ひどいことをしてしまつて。ぼくは、ぼくは」

「あやまることはないわ。尚樹くんは、わたしで童貞を捨てたかった。わたしは、尚樹くんの童貞が欲しかった。合意して、お互いの望みをかなえたのよ」

「で、でも、ぼくは強引に」

なおも頭を下げる尚樹の目の前で、彩海がにっこりと笑った。妖艶にして優美な笑顔は、許しなど最初から必要ないと告げている。

彩海は笑顔のままの美貌を、尚樹の股間に近づけて、精液まみれの亀頭に唇をつけた。射精したばかりでまだ敏感な亀頭に、快感の電流が走りまわる。それこそ、ついさつき尚樹のどこかへ飛んでいた意識を現実に取りもどした快感だった。

口だけでなく、彩海の右手が肉幹を握り、左手が睾丸を包んだ。それぞれ、硬い棹を下にしごき、やわらかい二つの玉をくしゃくしゃと揉む。唇からは舌が伸びて、亀頭に付いた体液をペロペロと舐め取る。

三か所の異なる刺激が渾然一体となって、尚樹はたまらずバスタブの上で裸の尻を前後左右にくねらせてしまう。

「はああ、んっ、ちゅ、んん、尚樹くんのおちんちん、とってもおいしいわ。うっむむん」

「あ、彩海さん、なにをするんですか!？」

「もちろんフェラチオよ」

答える間にも、唇はほとんど亀頭から離れない。声を紡ぐ動きでチロチロと亀頭をこす

り、吐息までも愛撫をしてくる。もちろん両手はしごきと揉みこみを器用につづけていた。「気持ちいいかしら？　こんなに硬いままなんだから。一度出しただけでは、全然満足していないでしょう。すぐに出させてあげるわ、ちゅっ、んちゅっ！」

「そ、そういうことじゃなくて、うっ、くっ、どうして、こんなことを、ぼくにしてくれるんですか？」

快感に溶かされそうになる理性を必死につなぎとめて、尚樹は質問をくりかえす。愛撫される自分のペニスが奏でる濡れた摩擦音が、キュツキュツ、ぬちゃぬちゃ、と耳に入り、快感の高まりを後押しした。

彩海は、両手を巧みに動かして愛撫を与え、亀頭をぬるぬると舐めまわしながら、頭上の少年に笑いかける。

「ずっと尚樹くんに、うっんん、ちゅっ、こういうことをしたかったの。ああ、聡史くんがアメリカに行つてから、誘っていたのに、はふう、相手にしてくれないんだもの」

「どうして、ぼくに、そんな、はううっ！」

彩海が唇を大きく開いて、亀頭全体をすっぽりと口内に含んだ。唇と舌と口内粘膜全体を使って、亀頭をこすりたてる。ぬめぬめとした摩擦音が、今度は耳ではなくペニスを伝わって、直接脳に聞こえてくる。腰が碎ける悦楽が、体内を熱くした。

「おうっ！　うおう、気持ちいい！　彩海さん、たまらない！」



肉幹も絶妙の握力とスピードでしごかれる。ただ指が上下に動くだけでなく、ひねりが加えられて、亀頭の傘の裏側を搔かれるたびに、ピリッとした電流が走った。

寧丸の愛撫も休みなくつづいている。自分の手によるオナニーでは触れたことがない二つの玉は、五本の指でやさしく転がされ、揉みほぐされて、未体験の心地よさを休みなく生みだしていく。

童貞を失ったばかりの少年が、抜群のテクニクの初フェラチオと初手コキのダブルパンチに耐えられるはずがない。バスタブの縁に乗った尻のくねりが一段と大きくなり、せないほどの痺れが下半身を襲う。二度目の射精のトリガーが強く引かれた。

「ああっ、ダメだ、彩海さん！ 出ちやうから、口を離してっ！」

尚樹の叫びに応じて、彩海の顔が後退する。しかし亀頭を口内に残したまま動きが止まり、舌先で鈴口をチロチロとつつく。その刺激が、最後のひと押しとなった。

「だめだあつ！ で、出るううううっ!!」

バスタブから尚樹の尻が浮き上がった。無意識に両手の指を、彩海の濡れた髪にからませる。全身が震え、左右の踵がバスタブを何度も蹴った。

「うおおおおううううっ!!」

左手にいじられる寧丸からマグマがあふれ、肉幹を握る右手の指の中を通過して、焼けつく亀頭の先端から噴出する。

盛大に飛び散る精液が、彩海の口内と喉の粘膜を撃った。

「うんんんっ、ぐむっ！ んむううっ！」

尚樹の見つめる前で、彩海の顔がとろとろに蕩けていく。黒目がちの瞳がトロリと潤み、形のよい眉が溶けるように下がる。亀頭を咥える唇の両端から、白く粘ついた水滴があふれて、顎へと伝い落ちる。

そして白い喉が上下に動き、口内の液体をコクコクと飲み下しているのが見て取れた。

「飲んでる！」

尚樹は驚きのあまり、思わず声に出してしまった。

「ぼくが出した精液を、彩海さんが飲んでる！」

尚樹の感嘆の言葉を肯定するように、亀頭を咥えたままの彩海の顔が上下する。その動きが、また尚樹に快感を送り、尿道内に残っていた精液がまた押し出された。彩海の口内でひくつく鈴口から、新たな精液がこぼれて、それがまた尚樹の快感の引き金になる。

「ううっ、またっ、気持ちいい！」

よがり声をあげながらも、尚樹は彩海の顔を見つめた。フェラチオ初体験の少年にもわかる。自分の精液を飲んで、彩海は悦び、幸福を感じている。心の底から望んで精液を胃に入れていたのだ。

「彩海さん、なにがどうなっているんですか？」

口の中の精液をすべて飲みこんでから、彩海は亀頭を口から出した。精液はきれいに舐め取られて、逆に唾液がまぶされてテラテラと光っている。

「はああ、おいしい。尚樹くんの精液、何度でも飲みたいわ。うふ」

口から出しても、肉幹を手放そうとはしなかった。自分の唾液にまみれた亀頭に、愛しげにシュッシュッと頬ずりしながら語りつづける。

「わたしこと布施彩海はね、エッチな女なのよ、尚樹くん」

尚樹もペニスから湧く淡い快感を味わいながら聞くしかない。自分の勃起をうっとりとし、慈しむ人妻の、妖しく充足した顔を見つめる。

「エッチなつて」

「正確には、どうしようもないほど淫乱で、困っちゃうほどマゾなの」

「淫乱!? マゾ!? えっ、えっえっ!!」

美貌に現れた微笑みや、とても明るい口調からは、冗談だと思えない。しかし事実尚樹のペニスに、愛しげに寄りそっている。

「前戯をしていないのに、尚樹くんのおちんちんがすんなり入ったのも、わたしが淫乱だからよ。尚樹くんを誘惑している間に、ドキドキしてすっかり濡れちゃったわ。普通の女の人にあんな急なことをしたら、傷つけちゃうから気をつけて、ね」

今度は園児の悪戯をたしなめる保母の口調だ。とても自分の性癖を告白しているとは思

えない。

「いや、その……」

「わたしが聡史くんを恋をして、結婚したのも、聡史くんが淫乱マゾ女を満足させてくれるすてきな男性だからよ。んちゅ、ちゅ！」

言葉をひと区切りさせると、また亀頭にキスをくりかえした。唇が触れるたびに、尚樹の身体がビクンと跳ねる。

「でも誤解しないでね。わたしはエッチだけど、誰とでも寝る尻軽ではないわ。今までは高校のときにつきあったクラスメイトと聡史くんだけよ」

「ええっ！ つまりぼくが、彩海さんの三人目の男ということですか!! どうして、ぼくなんか、彩海さんの三人目に？」

「わたしは直感でわかるのよ。自分にふさわしい男の人が。尚樹くんは、わたしのような女にぴったりの男の人だわ。だから尚樹に襲ってほしくて、毎日短いスカートで誘惑していたのに、全然相手にしてくれなくて、じりじりしていたのよ」

「ぼくは今日まで一度も女の人とつきあったことがなくて、キスすらしてない。正真正銘の童貞だったんですよ。その、エッチな女の人にふさわしいところなんて、どこにもない」
「わたしの本能の鑑定眼を信じて、ね、尚樹くん」

「だけど、彩海さんは人妻です。聡史さんの奥さんなんだ。これは不倫だ。聡史さんに知

られたら、どうなるか。いや、知られなくても、聡史さんに隠したままつきあうなんて、ぼくにはできません、ひやつ！」

また鈴口にキスされ、強く吸われた。尿道にかすかに残っていた最後の精液が吸い出され、彩海の口に入る。

「わたしではだめなの、尚樹くん？ わたしが嫌いななの？ それとも高校に好きな女の子がいるのかしら？」

ふるふると尚樹は首を横にふった。

「彩海さんが嫌いだななんて、とんでもない！ 好きな女の子も、いません！ ぼくははじめに会ったときから、彩海さんがずっと好きでした」

「それなら、なんの問題もないわ」

また首を左右に動かす。

「問題は大有りですよ。彩海さんのほうに……」

彩海が男根からひらりと離れ、尚樹に背を向けて、ネコ科の獣のごとくしなやかな四つん這いになった。首を背後にねじって、皮膚にまとわりつくような視線を流しながら、ワンピースの裾をまくり上げた。いつの間に脱いだのか、マジックのようにパンティが消え失せている。

豊熟尻を突きつけられて、尚樹は言葉を失った。

はじめてまじまじと見る彩海の尻は、完熟果実のように重たげで、汁気がたつぷりとつまっているようだ。圧倒的な大人の女尻の迫力は、両腕を広げても抱えきれないと錯覚させる。一度視線を向けたら、魂を奪われて、二度と目をそらせない魅力にあふれていた。

「お願い。夏だけでいいの。聡史くんがいない夏休みの間だけでいいの」

彩海の上体が前に傾き、顎をタイルにつけた。反作用で膝が伸びて、尻がより高く掲げられる。ワンピースの布から移った水滴がいくつも、白い尻たぶの上できらめく。

「わたしを、尚樹くんの好きにして」

尚樹の顔に近づけた尻の左右の肉を、彩海自身の両手がつかんだ。上半身を顎で支えて、指を二つの尻たぶにしつかりと食いこませる。乳房の縦横無尽な柔軟さではなく、みっちり肉がつまった重いやわらかさが際立った。

「わたしの身体を自由にしたいの」

淫靡な懇願の言葉が彩海自身を刺激しているのか、尻たぶが朱色に染まって、大きな桃を思わせる。尻桃が自分の手で引っぱられて、尻の谷間が広がった。白日のもとにさらされた深い谷底の奥の奥に、ひっそりたたずむ蕾があらわになった。

「これ、これは……」

蕾は今にも開花しそうにひくつきながら、開こうとはしない。多数の細かいしわが集まって作られた、女の身体を飾るもうひとつの可憐な花だ。

（彩海さんが、ぼくにお尻の穴まで見せてる！）

女の肛門を目にすることなど、一生ないと思っていた。いや、むしろ大便を出す排泄口など、見るべきものではないと思っていた。

（彩海さんは堂々と見せてる。普通じゃない。やっぱり本人が言ったみたいに、彩海さんはちよつとエッチな人なんだ！ だけど……）

見るべきではない女の第二の秘密から、尚樹は視線をはずせなかった。彩海の肉体の一部というだけで、それはただの排泄器官ではなく、妖しく淫靡なものに変化して見えてしまう。

もし彩海が動かなければ、尚樹は魔力に囚われたままだったかもしれない。

両手が尻の表面を滑り降りて、また恥丘を開いた。再び肉色の花が開き、透明な蜜液があふれる。彩海の体液は左右の太腿を伝って、膝をついたタイルを濡らした。

「入れて。もう一度、尚樹くんのおちんちんを深く突き入れてほしいの」

指で開いた女性器と肛門を見せつけながら、巨尻が上下左右にくねりはじめる。揺れ動く尻の向こうからは、甘ったるい媚態を含んだ声が流れた。

「尚樹くんのおいしいおちんちんで、たくさんイカせてもらいたいの」

「あ、彩海さん……」

二度目の射精をしてからも手と口で刺激を与えられていた男根が、あらためてギリギリ

といきり立ち、血管をくつきりと浮き上がらせる。なにか怪しい葉でも注射されたかのよ
うに亀頭から擧丸、そして腰の奥までがカッカッと燃え盛り、いても立ってもいられなく
なった。

（だめだ。こんなことに誘惑されては……これ以上、彩海さんと関係を持つのはいけない
ことなんだ）

頭の中で何度言い聞かせても、視線は乱舞する彩海の尻から離せない。バスルームから
出ていくこともできない。

「お願いよ、尚樹くん」

彩海の顔がひねられ、紅潮した横顔が尚樹をにらんでくる。少年の全身を金縛りにかけ
る妖美な肉体を持ちながら、その顔はどこかはかなげな空気を醸しだしていた。自分で告
白したように、攻められることを求めているのだと確信させる。

（マゾだ。本当に彩海さんは）

思いが彩海の魅力に引きつけられて、声になって出てしまう。

「マゾなんだ」

その言葉を口にした途端、身体の中でなにかが動きだした。ずっと静止していて、存在
することすら忘れていた歯車の群れが噛み合い、回転をはじめたようだ。呼応して、下半
身を焼く火炎がさらに高く噴き上がり、尚樹の意識をぐらぐらと沸騰させる。

「彩海さんはエッチで、ひどいマゾだ。でも、ぼくはずっと、そんな彩海さんが欲しかったんだ！」

バスルームに反響する叫び声とともに、尚樹は両手で尻肉をつかんだ。力を加減できずに、白い肌に爪の跡をつけてしまう。

「彩海さんの望み通り、入れてやる！」

顔にはなく、尻の奥深くに、肛門と女性器に、言葉を叩きつける。

彩海の横顔が歓喜に染まり、妖しく輝いた。

「ありがとうございます、尚樹くん。ああ、彩海をたっぷりと泣かせて、イカせてくださいね」

「イカせてやる！」

尚樹はそそり立つ勃起を、開いた濡肉花の中心に叩きこんだ。だが、まだ狙いはずししている。また彩海の右手が亀頭をつかんで導き、膣の奥へと挿入させた。

再び、熱く燃え盛る高校生の男根と淫猥な人妻の肉壁がからみ合い、互いの喜びを掘り起こす。

「うおおっ、熱いっ！ 彩海さん、気持ちいいっ！」

「あっひいっ！ 尚樹くんのおちんちんで、わたしの中がいっぱいよう！ はおおおおうっ！」

はじめての後背位を、尚樹は腹にぶつかる尻の量感で味わった。乳房とは違う尻肉の硬さが腹を叩いたびに、新たな官能の悦びが湧く。

少年の単調でリズムもないピストンを、彩海は膣内だけでなく全身の細胞に刻みこんだ。自分に悦びを与えてくれる新たな主人の鼓動だ。脳の神経の配線が変わり、痺れる歓喜の回路を描く。

「ああ、ああ、あひいいん！」

新たに生まれた快樂回路に、鮮烈な電流が走る。彩海は肉悦の波に溺れ、わけもわからずタイルに頼ずりした。自然と舌が伸びて、フェラチオのように水たまりを舐め吸う。

「尚樹くん、わたし、わたしい！」

経験豊かなはずの人妻が、高校生よりも先に高く飛翔してしまった。白いワンピースをまとわりつかせた全身がわななき、両手の指が濡れタイルを掻きむしって、絶頂間近の法悦を訴える。

「すごつ、すごいひい！ 尚樹くん、もう、わたしい、イッチャふううううつ!!」

「うわつ、彩海さん、締めつけすぎるうつ！ ぼくも搾り出されるう!!」

ワンテンポ遅れて、尚樹も射精のスイッチが入った。尚樹自身の意志ではなく、先に絶頂を極めた彩海の膣に精液を吸い取られる。

「ほおおおうつ！ 尚樹くんの精液を、またごちそうになっているわ、あああ、つづけて、

つづけてイッちゃううっ！ イックうううっ!!」

彩海はエクスタシーに酔いながら、さらに若い精液を搾り取ろうと、尻をふりたてる。その動きは新たな快楽を生み、自分自身もまた次の絶頂をめがけて疾走していった。

人妻の尻のくねりに引きずられて、尚樹も四度目の射精のために、腰を彩海へぶつけた。「彩海さん、もっと、もっと犯してやるっ！」

「犯して！ わたしを犯しつくしてっ、はおおうううっ！」

十年の年の差を埋める歓喜のデュエットが、バスルームに充滿して、途切れることなく布施の家屋全体に流れた。

*

バスルームからあふれる嬌声の渦の中で、その人影は小さく縮こまり、じっと凝り固まっている。少しでも手足を動かせば、自分が家の中に潜んでいることが知られてしまうと心配して、ただ二つの瞳だけを輝かせつづけていた。

バスルームの開けっ放しの扉の前は、当然、脱衣場だ。脱衣場のドアも、あわてて飛びこんだ尚樹が開いたまま。

その廊下へ向けて開いたドアの陰に、侵入者は正座をしている。ドアから覗かせた顔から伸びる視線は、ためらいながらもまっすぐにバスルームに到達して、開いたまま入り口から見える男女の結合をずっと監視していた。監視は今も継続中だ。

もちろん尚樹は、自分の童貞喪失を観察する者がいるなど、知るはずもなく、彩海と交わっていた。

だから、気づくはずもなかった。

視線の主が、居間の本棚に置かれた古い写真の中で、彩海と並んでいるもう一人のチアリーダーと同じ顔をしていることには。

教室にいるときと同じライトグレイのスーツとロングスカートで身を護る数学教師沖名静子は、両手の指をきつく握り、爪を自分の掌に食いこませていた。いつもは謹厳実直な容貌を、淫らな光景に赤く染め、嘔みしめた唇の端から、ひと言だけ声がこぼれる。

「犬養くん……彩海、どうしてこんなものを見せるのよ」

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>